

の中から、戦犯容疑で連行された者が幾人かいました。十二月、塘沽の港から、米軍の上陸用舟艇のLSTにて佐世保に上陸しました。

復員手続や身体検疫の後（二、三日後）に復員列車にて故郷に向かいました。鉄道沿線の各都市が丸焼けで瓦礫の山となっている状態は大きなショックでした。そのような窓外の景色を眺めながら、過ぎ去った戦場のことや頭の中で走馬灯のごとく走りました。と同時に、日本の再建を思いつつ十二月二十三日、西那須野駅に到着しました。我が家まで二時間の道程を歩きながら、出征前のごや将来を思いました。

玄関を開けて、「今帰った」と一言。後は言葉なしです。両親もただ茫然と私の顔を見ていました。万感胸に迫り声もなく、ただ涙のみでした。

暁に散りしという

我が飛行第六十戦隊

三重県 藤原長録

私は昭和十四年一月十日、岐阜県稲葉郡各務ヶ原、第一航空教育隊第二中隊に入営し、ここで第一期の教育を受けることとなり、飛行兵、機関工手として、六カ月間の教育訓練を受けました。

こうしたうちにも支那事変は一方的に拡大し、またノモンハン事件なども含めて、いやが上にも国を挙げたの総力戦へと一步、一步進んでいたのです。

同年六月二十五日機関工手を命ぜられ、同日飛行第六十の戦隊に転属させられ、まず原隊ともいう飛行第七戦隊浜松重爆撃機隊に配属、と同時に動員下令、六月二十九日宇品より輸送船に乗り兵馬共々に、七月二日北支大沽たいくに上陸しました。これより輸送車両により、北京郊外南苑飛行場に着いたのです。この時期のこ

とを今振り返って見ますと、輸送船に一体何人乗船し、何人がここ南苑に着任したかはどうしても思い出せません（もう六十年以前も前のことですから）。

私は若年の新兵として当時何が何だか分からず、大きな流れの中に流されている自分のことしか理解することもできませんでした。

私の着任したのは、北支派遣、徳川兵团、木下部隊、田中部隊、鈴木隊であったと思います。即ち、飛行第六十戦隊の創生期で、当時第三飛行集団の直属の部隊であり、かつ「団」作戦の遂行のための編成強化拡充の一環としての補充要員として配属されたのであります。

ここ南苑の兵舎は元十九路軍、宗哲元の駐留した所で、広大な飛行場と野戦航空廠を有した推定四キロ平方以上の規模であったかと思われました。その全域の中央、南北に幅太く長い滑走路を、また、その側東に航空廠、側西に我が部隊と飛行場大隊の兵舎が並び、さらに弾薬庫が間隔を置いて配置されておりました。この全域の四周には深い堀割りが巡らされ、容易に敵

の近づけない地形になっておりました。また航空廠も、その舎屋を整備拡充のために増築中でありました。

私が南苑に着いたころは、部隊は満州ノモンハンから引き揚げて、一部は九三双発軽爆撃機と九七重爆撃機の機種変更のため内地に引き揚げていたようにも思えます。さらに鈴木隊は中隊将校と下士官一班、二班、兵一班、二班、三班、に分かれ、兵舎は三棟に分かれておりましたが、あまり兵三班の方は知りませんでした。確か私の所属する第二中隊は鈴木清大尉で、班長は中曾根軍曹でしたが、間もなく田島軍曹に代わりました。当時私は、田中曹長の当番兵として同氏からいろいろと指示を受け、また田島軍曹からは機付兵として機体整備やエンジン整備について手ほどきを受け、機付長としての田島軍曹と離隊するまでご一緒にさせてもらいました。

そのころの部隊の雰囲気はとてども士気旺盛で、とりわけ第二中隊鈴木隊はだれ彼なしに、一兵卒の私ですら皇軍の華といった自負心と誇りを感じるほどで、部隊全体がこれから始まろうとする大本営直接の統一指

揮作戦、奥地進攻整備の真っ最中でありました。いよいよその全てのための準備が整い、その総仕上げとして木下敏中將を迎え、八月、内蒙古五原に攻撃を実施したのであります。

前進基地は包頭でしたが、私はまだ初年兵で残留部隊として南苑におりました。その見送りは盛大で、集團長自らの出撃は感激せざるを得ませんでした。その第一編隊は第二中隊小関曹長機で、搭乗者は木下中將、田中大佐、鈴木清大尉、鈴木整備中尉、その他計七名ほどの方々であったと記憶しています。

そのころ、教育隊で同班であった元男爵の子息黒田某が少尉任官で部隊付きに着任し、さらに溝口飛行場大隊に中学の同級生、田中新治が經理部付きで配属されて、お互いの無事の再会を喜び合いました。

話を元に戻して、昭和十四年七月九日以降、部隊の一部は作戦準備のため、北支最前線運城に前進しておりましたが、九月下旬に入って全部隊が運城に集結、十月十日より本格的攻撃が始まりました。

当時の重爆撃機は、私が当初南苑に着いたときには

九三双軽爆撃機があり、また一部にはイタリヤがエチオピア作戦で使用した「イ式陸攻」という飛行機も残っていました。部隊も一個中隊九機の二十七機編成でした。それが六月以降充足され三十六機編成になり、雁行編隊が菱形編隊に、さらに零機長、零機幅、と訓練に訓練を重ねられ、飛行機の防備も機内燃料タンクの改造、後上砲、後下砲配備、さらにはラジオビーコンの搭載、またスーパチャージャーの取付け等々あらゆる部門が改装され、夜間の翼上灯にいたるまで現地の実戦に沿うように改修されました。

特に運城は黄砂のひどい所で、砂塵は大空に幕を引くごとく押し寄せてきます。それに滑走路は主滑走路のみで、それも仮補修のため容易に離陸できない場合もしばしばでした。また、運城は大陸奥地で基地近くには塩池があり、井戸水は塩分が多く含まれて、飲料水は遠く太原からの補給をまたなければならぬ土地でした。

第六十戦隊が三中隊に編成されましたのは昭和十四年六月十日ごろでした。

第二期東清作戦、航空撃滅戦、並びに要地攻撃「田号作戦」は、同年十月三十一日まで敢行されましたが、一度は南苑に引き揚げ、同年十二月二十日より再度運城に転戦することになりました。これが第三次奥地進攻作戦であります。

六月よりこの十二月末ころまでの主たる攻撃目標は、前段では五原、清源、洛陽、後段は重慶、蘭州で、通称「百号作戦」と呼称しました。これは海軍と協同作戦で、特に十一月二十六日より同月二十八日の爆撃攻は日本空軍史上最大の戦果を挙げ得たと称されたのであります。

昭和十四年度後半、いつか私も軍隊の生活に慣れ、後期兵を迎え、内務班付伍長勤務として後期兵の世話をするようになっておりました。さらに機上機関、また機上射手の修得を命ぜられており、空中勤務要員の一員に加えられておりました。

振り返って、この一年教育隊から常に一緒に行動を共にしてきた、静岡県磐田市出身の同期の中崎秀夫君とは死生を語り合い、お互いに励まし慰め、酒を汲み

交わした仲でした。そのころはずごく長い時間を感じたり、はたまた、余りにも早く過ぎる時間を感じたこともありました。そのほざまに、ある時は郷愁にかられ、あるいは外気への憧れを夢見たものでした。

その頃に空中勤務要員として扱われるようになって、初めて重慶攻撃に参加の命令が出たときは全く、自分が名前を呼ばれたもうわの空でした。それは翌日の搭乗者を夜の点呼の時に読み上げられるのです。第二中隊一番機、戦隊長、中隊長、正操縦、副操縦、無線気付爆撃、射手、と順次搭乗者名が呼ばれました。その最後に射手、藤原伍長と言われたようでもあり、改めて中崎伍長に問い直す始末でした。その夜はとても寝つかれもせず空恐ろしさに夢うつつの間に夜が明けそめたころ、自分で試動させた愛機に搭乗して離陸しておりました。

ようやく薄もやの中に、田島機長の「位置につけ」に思わず後上砲の天蓋を押し開けて重機砲を握り締めておりました。眼下に重慶の街がY字形に流れ下る場子江に挟まれるように見えました。この瞬間、ふと眼

下の人々は、まだ眠っていて、それでそのあわてふためきの様子が頭の中を横切ったような思いがしました。今飛んでいる高度は約六千メートル、敵の地上の重砲火は絶える間なく愛機の近くに炸裂して、その振動で機はガタガタとゆれる中を、五百キロの爆弾を抱えた我が三十六機全機は一糸乱れることなく弾倉が開かれ、投下されてゆく爆弾が次々と大地に吸い込まれるやいなや閃光を發して、その煙の中に重慶の街が黒く閉ざされてゆくのを後方に眺めました。機は高度を下げながら帰路約六百キロ、着陸まで約三時間でありました。機内で銃座を離れ、酸素吸入器を整頓し、後方座から這いながら中央操縦席よりに進み、田島機長と脚昇降桿を 작동するころ、懐かしい基地が眼下に見えましました。機はまるで何事もなかったごとく近づくや否や軽く接地を終え、自機の誘導路上の繫留地点に翼を休めることができました。私が初めて攻撃に参加した思い出であります。

南苑基地で昭和十五年の正月を迎えた我が部隊は、いやが上にも士気が高揚しておりました。このころ、

第六十戦隊歌が制定され、さらには支那事変第一次論巧行賞の筆頭に我が部隊全員が浴し、私も勲八等白色桐葉章を拝受しまして、恩賜の煙草を口にしたのも、このころだったと記憶しています。

昭和十四年九月、ドイツがポーランドに進攻するや第二次世界戦争の様相を帯び、否応なく我が国もこれに巻き込まれるような運命の時代となりつつあるように感ぜられましたのも、ちょうどこのころではなかったかと思えます。なぜなら、このころの風聞によれば、南支の南寧攻略戦が始まっていたようでありました。外部との接触を全く持てない軍隊の前線では、知る術もないことでした。

何にせよ、この昭和十五年の一年間に、目まぐるしい変転があるうとは夢にも思いませんでした。一月より四月二十八日までには南苑にあってエンジン交換並びに耐寒訓練を兼ねた地上部隊協力爆撃で、軍の連絡任務のために石門、太原などへの飛行などがありました。また爆弾投下並びに編隊訓練があり、私はもっぱら射撃訓練のため、連日のように永定河上空に目標的の吹

き流しめがけて発射する次第でした。この時の吹き流し牽引機には旧九五戦が新しく配置されました。九七一型戦闘機は、主に森本曹長が操縦され、時に田島軍曹も付いて行かれました。特に森本曹長は人気のある方で、重慶攻撃では接地攻撃をするような方でした。

特に冬期は十分な活動はできないのを中国軍も察知してか、地上戦が各地で起こっているようで、部隊の一部は石家荘や太原に地上部隊援護協力爆撃を行っておりました。また一部は宜昌作戦があったようです。

ちょうどこの時期だと思いますが、我々の田島機に張家口前進基地への単独軍連絡飛行が命ぜられました。その当日愛機の試運転を始めましたところ、プロペラの振動が悪くどうしても発進できなくなり、やむなくそのことを橋本整備隊長に申し出ましたところ、急遽小関機が交換機として発進されるよう命令が変更されました。私たち田島機の者は前々日プロペラが調子悪くこれを交換したのですが、これも十分でなかったのです。この事で同年の中崎や吉田が応援にかけつけてくれたのですが、時間に間に合わず、小関機が発射し

ました。

ところが小関機は先方に着いて折り返して戻ることになっていたのですが、その戻り通信ができなくなつたとの情報が入ってきました。その時は何かの事情からか、あるいは無線の故障で通信ができないのかとも思いましたが、所定の時間が過ぎても一向に連絡がなく、中隊一同はただただ行く手の空を見上げて待っているばかりでした。そのうち日も沈み、滑走路に緊急着陸の準備がされ、点々と空の半切れドラム缶が配置され、廃油の滲み出た布地に火がともされ、異様なまでの霧閉気の中に小関機の帰還を祈って待ちましたが、最早どうする術もなく、中隊一同無言のまま夜半過ぎ兵舎に引き揚げたのです。

昭和十五年四月、いよいよ第四次奥地進攻作戦が始まり、その準備も完了し、五月十七日再度運城に進出しました。このころ、戦隊長が小川小二郎中佐に代わり、また中隊長以下中隊将校の異動がありました。別府赫少佐が中隊長に、桜井少尉、内海整備中尉等が転任配属されたのもこの頃だと思います。

運城の出撃は、重慶、梁山、成都、銅梁、と連日の出撃を繰り返しており、各中隊とも愛機の整備に追われながらも五月、六月と移り、七月、八月と九月初旬まで「百一号作戦」を続行し、璧山、重慶、梁縣、武功、威陽への攻撃を続行していました。この時の出撃で我が部隊にも多くの損害を受け、被弾や空中接触、また敵砲火により自ら自爆の途をたどった機もあり、敵戦力もあなどり難い一面もありました。第三中隊の松山隊長機も、このときに、漢口に不時着したことも起こりました。

九月四日をもって第四次進攻作戦は終了し、九月五日以降は南支作戦のため南京、漢口、広東に転進し、昆明（雲南）、桂林の攻撃を実施した後、南苑に戻り、対熱装備に全てを切り換えました。

九月十四日南苑を出発、途中漢口を経て十九日広東に着陸。このころ既に、桂林撤退作戦が行われており、我々はこれから海南島の海口に進駐することになり、そこで撤退作戦と温暖地帯に対処するための訓練を実施していました。我々は一旦海口を引き揚げ、再度南

苑に戻り機体整備を完了しました。

同年十一月、我々は台湾嘉義を中継地点として仏領ハノイのジャラム飛行場に進駐したのですが、この途中、嘉義は台風の中にあつて各編隊機は単独着陸をよぎなくされ、約三機ほどがこの台風のために犠牲になりました。ただ思い起こすのは台湾での青畳の香りと味噌汁の接待が忘れ得ないものでした。

約五日間ほどの滞留ですぐさま海南島、海口に着き、ここで南方向きの軍装と、見なれない新しい軍票を支給され、いよいよ仏印ハノイ郊外のジャラム飛行場に降りたちました。

ここでの作戦は敵の援蔣ルートの破壊であり、特に天候に支配される同方面の攻撃は状況も悪く、あまつさえ高度三千メートル級の山岳が重なる地帯での狭い谷に対する攻撃は困難をきわめ、特にメコン河上流の効果橋爆破は不可能に近いものでした。我が別府中隊は連日爆撃機を投入して行動を繰り返しましたが、どうする術もなく、同年五月、南方より引き揚げざるを得なかったのです。

我々は南支方面軍の指揮下、一旦南京に引き返し、さらに六月一日に懐かしい南苑に着陸しました。時に昭和十六年も早秋を迎えようとしており、ニセアカシアの葉が色づき始めていました。何かしらホッとした気のゆるみが出る一時でした。

しかし、これも束の間、再び運城から武昌へと転戦、「百二号作戦」に従軍、九月二十三日、「第二飛行集団作命第三八四号」による機種改選のため基地南苑を出発、同月浜松基地に着きました。その翌日、すでに海軍で使用している葉巻型の新機種九七重爆撃機二型を授受しました。そしてこの機の試動点検を始めることになりました。

ここで少し私自身のことを含め、当時の状況を申し述べますと、昭和十五年十一月十日付けで伍長任官、同第二中隊下士官第二班に配属、翌十六年二月、正規に機上射手を命ぜられ、同年六月三十日、機上機関術を修得。同年九月給一等給を支給されました。勿論、この時より第二中隊一〇七機の機付長として田島曹長のご指導を受けながら任務に就くようになり、吉田伍

長、多田上等兵と三人で同機を整備しておりました。当時の整備班長は新海中尉で、中隊長は私と同郷の亀山出身の別府赫少佐でした。また私の機長は同じく同郷の亀山出身の桜井中尉で、これらの方々に支えられ軍務に励んでおりました。

そのころ、世界情勢はA B C Dの包囲網が形成され、一滴のガソリンも大切にせねばならない有様で、いづどのような事が起きるかわからないという瀬戸際に日本があったのです。そのような気配の中で一日も早く新型機の整備を急がねばならない。それ自身が、我々の目標は南方に求めるための行動であると、言わずもがなの中に理解していました。

昭和十六年十二月五日、部隊の全体が大方の整備も完成し、あらゆる地上並びに空中での訓練も終えようとしていました。ちょうどこの日、私は拝受した二型機はどうしたわけか尾輪が十分操作できないので、これを交換する作業を続行していました。そのとき、突然尾輪が爆発し、私は重傷を負い、即刻浜松陸軍病院に収容されました。一時は頭の中は真っ白になり、何

がどうなったのかは判断がつきませんでした。それからどのくらい時間が経ったか、病院のベッドで起き上がろうとしましたが体が固定されていて左腕が動かないし、左脚も動けない、左手、左足は石膏で固められ、その上幾重にも包帯されていました。そこでやっと気が付いたのでした。

そして二日目でしたか、私は看護婦、看護兵に助けられ、病院の中庭にベッドと共に吊り出され、「今、君の部隊から連絡で、出発するからこのように中庭に吊りだせと言ってきたのだ」とのことでした。耳はよく聞こえました。そして空を見上げると懐かしい新二型の爆音と共に一機また一機と轟音と共に機体をゆすぶらせながら、病棟の上空から現われては消え、また現われては消え去って行きました。取り残された自分自身のいらだちはどうする術もありません。これぐらゐの事ならずぐにでも戦隊に復帰できると思っております。

しかし、この年も終わろうとする十二月二十五日、同病院より次のように言い渡されました。即ち「君は

十一月五日付けをもって九州第九教育隊に転属、同日付け同隊第一中隊付けとなり、これより九州新田原陸軍病院に転送することになったのでただちに準備し、同伴に婦長一名を同行させる」と言い渡されました。このころ、私は肩から左手をつり、松葉杖を足にしておりましたので、びっこを引きながら浜松の駅のホームから汽車に乗り込んで丸一日半ようやく新田原陸軍病院に着き、婦長に別れを告げ、あてがわれたベッドに収容されました。

年が変わり昭和十七年一月、陸軍航空兵軍曹に任せられたと第九教育隊第一中隊より通報を受け、軍服が届けられましたが、それを着用することはほとんどありませんでした。ただ白衣の胸の階級章に私の身分が示されてあるのみで、毎日毎日、看護による手足のりハビリに泣く思いの痛さを味わっております。

二月も半ばを過ぎると、十分歩行もできるように治癒し、この分なればまず兵として勤務に耐えると思っております、一日も早くと願いながら、六十戦隊の戦友の一人一人はと案じたり、またこの身の不覚を

うらめしく思ったりしておりました。

新田原には第百一部隊が駐留してパラシュートの降下訓練が病棟より眺めることができました。一度教育隊を訪れたいと願っておりましたが、一向にその機会がないまま運命の最後通告を受ける日となりました。

「昭和十七年三月六日、陸軍航空兵軍曹藤原長録は左手爆創兼左大腿部打撲傷、左手骨折のため現役予備役を免除す」

との通告を受け、ただ頭の中はぼんやりとしておりました。だが院長葛城軍医大佐の言葉ははっきりと覚えています。『何よりこれから日本の国は大変な時代となる。君が地方人になっても別に心配はいらない。君の将来のことは、私が先の六十戦隊第二中隊の方から聞いているから家へ戻ってゆっくり休養しなさい。そのうちに君の家の方へ何事か連絡があるから』と訓され、迎えに来てくださったって先の浜松の婦長と共に白衣のまま帰宅したのであります。

傷病等差は恙等症（第二款症）でした。また小川部隊は、昭和十六年十二月八日付けの賞賜物件授受の通

牒には、準第二三七八部隊飛行第六十戦隊と明記されておりました。

家に戻って悶々としておりましたが、三カ月過ぎ四月となっても何の連絡もありませんでした。五月初旬に一通の便が舞い込み、その内容は浜松航空廠へ出向し、そこである人物と会えるということで、差出人は元別府隊の桜井中尉からでした。

早速、示された日時に指定の場所に出向、面会しましたのが大阪府立航空工業学校校長三輪元氏でした。

氏は広島高師範で桜井中尉の恩師に当たり、同氏より私の件を依頼されておられたのでこの話で『私さえよければ同校の教育心得として迎えたい、なお本校は設立日も浅いので設備も十分ではないがどうか』さらに、『また万一君が気に染まないならば当航空廠に雇員として（半任官待遇）勤めるよう、すでに決まっているが』と、事の次第を聞きました。

その日は『一考させてください、いずれ家の者と相談し、御返答します』と申して家路につき、思案をしているうち二、三日が過ぎましたが、さらに同校長よ

り強いて本校に勤めるようにと要請がありました。そして五月より学校に勤めることにしましたが、いずれも上野よりの通勤で朝五時起ききの毎日になり、さらに食糧日用品の配給等々、家の者のことを考え早急に居を大阪布施長瀬に求め、同校の整備主任として教育界に身をゆだねました。

敗戦まで約六年。ついに公職追放になり離職しました。その後、戦友中崎が訪ねて来られ、我が部隊の最期を知った次第です。中崎は昭和十六年末、かの浜松から北支南苑に戻るや程なく、加古川戦闘隊で教育を受け、内地訓練の後、再び彼の地の部隊に転属、命を得て帰還したとのことでした。

大東亜戦開戦の当日、暁の彼方南方の空に散華した飛行第六〇戦隊の勇士の皆様に、ただ一人生き残り、今八十歳の私は御冥福を捧げるのみです。

人々から忘れ去られた、今は無き我が花形第六十戦隊の栄光とその辛苦を、世の人々に決して忘れて欲しくないとの思いです。

【解説】

〔田号作戦〕

北支支那方面軍から受けた「田号作戰任務」とは（昭和十四年五月三日、航空兵団司令官に命じた）、ソ連からの援蔣補給路、西北ルート方面への進攻、すなわち蘭州、成都、重慶などの攻撃を主眼とするものであった。この進攻はソ連軍勢力の浸透増加と共にその困難性が増加していた。第一次進攻に我が伊式重（伊太利製）五機が撃墜された苦い経験が残っていたので、我が進攻部隊の整備、訓練は重大であった。

この田号作戦は、伊式重の行動半径、速度、耐弾力の不足などから、九七重を装備する飛行第六十戦隊の編制を強化拡充して実行されることになった。

掩護戦闘機を伴わず奥地進攻に任ずる重爆撃隊は敵防空戦闘機隊との激烈な空中戦が展開されることは必死であり、その勝敗は重爆撃隊の防御火網の強度にかかっていた。そのため三機の飛行機を小隊とするものを、四機菱形編隊とし、中隊を十二機、戦隊を三十六機とした。

飛行機第六十戦隊の装備は三十七機、予備六機と定められ、ほかに増加装備機十八機が認められた。編制定員は六六二名であるので、他の二十七機編制の重爆撃隊の四八四名に比し約五割も多い人員であった。

〔九七式重爆撃二型の性能〕

乗員 七名

型式 中翼単葉、引込脚

発動機 二ハリー

馬力 一三四〇 二基

機幅 二二・五メートル

機長 一五・九七メートル

全備重量 九二八五キロ

最大速度 一時間四三三キロメートル

高度 五〇〇〇メートル

航続距離 二八〇〇キロメートル

行動半径 一六〇〇メートル

上昇限度 一〇六七〇メートル

武装 七・七ミリ 四銃

一二・七又は二〇ミリ 一〜二基

積載爆彈 五〇〇キロト

一型 昭和十二年十二月 制式決定

二型 昭和十五年十二月 一号機完成

〔感状〕（昭和十五年十二月十日）

感状

第三飛行集団、同配属部隊、同協力部隊

右ハ第三飛行集団長木下敏中将ノ指揮ヲ以テ昭和十五年五月ヨリ七月ニ亙リ宜昌作戰ニ参加シ要時要点ニ適切ナル爆撃ヲ加ヘテ敵ノ統帥指揮ヲ萎靡慥状セシメ搜索ニ將タ指揮連絡ニ空地協同ノ妙ヲ發揮シ以テ第十軍ノ神速果敢ナル機動作戦ヲ容易ナラシメタルノミナラズ引続キ敢行セラレタル陸海軍航空進攻作戰ニ参加シテ長駆四川省内ノ要衝ヲ反復攻撃シ絶大ナル戦果ヲ収メタリ 特ニ右ノ進攻作戰ニ方タリ偵察部隊ハ単機克ク敵機跳梁下ノ奥地ニ潜入シ遍ク情況ヲ審ラカニシテ進攻作戰指導ニ資シ飛行第六十戦隊ハ天候氣象ノ障碍ヲ克服シ残存敵空軍ヲ撃滅シ重慶及其周辺ノ重要機関ヲ爆碎シテ壊滅的打撃ヲ与エタリ

昭和十五年八月ヨリ十一月下旬ノ間第三飛行集團主

力カ南支ニ転用セラルルヤ其一部第三飛行団ハ寡少ナル兵力ヲ以テ常ニ積極果敢ニ行動シ第十一軍、第十三軍ト密ニ協力シテ地上作戰ノ戦果ヲ大ナラシメタリ地上勤務部隊モ亦是等諸作戰ノ要求ニ即応シ不眠不休ク奮闘シ以テ空中部隊ノ戦力發揮ニ遺憾ナカラシメタリ之を要スルニ第三飛行集團ハ其強固ナル團結及ビ周到ナル訓練ノ精華ヲ發揚シ或ハ敵航空勢力ノ撃滅ニ或ハ地上作戰協力ニ或ハ戦政略要衝ノ破碎ニ克ク其任ヲ果シ全局ノ作戰ニ寄与スル処大ニシテ実ニ陸軍航空部隊ノ真価ヲ發揮セルモノト謂ウベク其武勲極メテ顯著ナリ 依テ茲ニ感状ヲ授与ス

昭和十五年十二月十日

支那派遣軍總司令官 西尾壽造

この感状の内容は、宜昌進攻における地上作戰協力、奥地爆撃、飛行集團主力南支転出後の第三飛行団の活動の三者からなっており、奥地爆撃は必ずしも最高評価を受けていない感じである。

(第三飛行集團の南支展開)

昭和十六年九月十四日、南支転進を命ぜられ飛行集團長は木下敏中将で、十七日広東に進出して安藤利吉南支方面軍司令官の指揮下に入った。

第三飛行集團司令部

海口

第一飛行団司令部

南支欽県

飛行第五十九・第九十戦隊

欽県

第二十一独立飛行隊本部

南寧

独立飛行第八十二・第八十四中隊

南寧

飛行第三十一戦隊第二中隊(軽爆)

南寧

飛行第六十四戦隊第一中隊(戦闘)

廣東

飛行第六十戦隊(重爆三六機)

廣東

独立飛行第十八中隊(司偵) 漢口↓海口

二十三日零時鎮南関方面から國境を越えた前線部隊は、同日早朝ドンタン付近國境陣地において仏印軍部隊と戦闘を開始した。第三飛行集團は通信ピラの散布等の手段により、戦闘停止、中国領引揚等企図伝達に努めたが戦闘はかえって拡大した。